

百人一首一夕話

9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8

百首一々話卷之八

目錄

西行法師 歌譯

西行の俗名義清が法

文覚西行の対面の法

江口遊女の話

伊弉衣濯川宮川歌合の話

寂蓮法師 歌譯

寂蓮顯昭独鈷鎌首争の話

皇嘉門院別當 歌譯

式子内親王 歌譯

内親王齋院と辞の法

西行二見浦の法

銀の猫の話

双林寺菴の話

吉野せき清水の俗鏡の話

三體和歌の話

定家つよ市名立の法



殷富門院大輔 歌譚

後京極攝政前大臣 歌譚

賴朝は系於名の婚禮を冊す法

新古今集序者の話

二條院讃岐 歌譚

賴政と射す話

高倉宮は謀反とすめむ法

長谷部信連防戦の話

賴政自殺の話

鎌倉右大臣 歌譚

賴朝つ喪去の話

賴家足立景盛妻を奪ふ話

良経公賊のあゝ殺す法  
は系於殿書風の話

仲綱馬と木下と名へる法

宮三井ちよ落れし法

宇治川合戦の話

沖の石の讃岐より話

賴家二代將軍の話

比企能員北条の一族と亡人より話

諸軍一幡君の館を囲む話

二俣川軍互の話

宋人陳和卿鎌倉よ來る話

実朝右大臣に任せし法

実朝公の首雪中より出る話

参議推経 歌譚

推経賀茂の社日春の話

歌藪兩道の話

賴家伊豆よ塾居の話

時政豆州より卒去の話

渡宋の大船を造る法

鶴岡社泰公曉実朝を斬る話

尾將軍の話

飛鳥井家懐紙書法の話

藤原秀御の商ひま  
 下野國の押領使なり  
 將領と射し賞ふ  
 天曆二年位下叙  
 西の俗の時  
 依て法をうけん  
 の名と則清文意清  
 諸書よまを字  
 治左大臣賴基公の台  
 記に義清とあり  
 記し義清とあり  
 決す日本史  
 記をせられたる左  
 佐つ對康は母の監  
 保は録むあり

西の俗の時  
 依て法をうけん  
 の名と則清文意清  
 諸書よまを字  
 治左大臣賴基公の台  
 記に義清とあり  
 記し義清とあり  
 決す日本史  
 記をせられたる左  
 佐つ對康は母の監  
 保は録むあり

十載集巻五の目前  
 歌のころの日  
 息をとりて日  
 物サビ  
 自然の心

日まはついでに... 渡ふりしりし

西行法師の話

佐藤義清は藤原秀郷九代の孫として代々武勇に譽れ... 小義清殊に勇氣... 兵法に通ず... 左兵衛尉に任ぜられ... 栄利を喜まずて常世と遁り... 使に補せしむるに... 職がれと好まざりし... 新殿成就の時上皇當時の名人も...

らめけけと義清即旧十首の歌... 朝日丸の所劔と下賜... 義清の譽に賀し... 者も弓射を遊び... 郎等男の走り... 何れも西行法師... 又或時一族の... 十洲の女...

又明日相約し望む又回しおせし  
 憲康もいよいよ世に其家一人の哭ありて怪  
 出家の志を決せし其情と陳て言と辨せられ  
 上皇其才と惜ませ給ひて或時義清外  
 ひの家をゆめ彼はあつたの向しは  
 其の恩愛と割断し我出離と好  
 義清其夜も妻子と捨嶮城の僧し

月十五日なりし西行在俗の時家富し君の寵遇も  
 西の帝の言は素門の家なりし脚し身と執り  
 蘭し石宛し硯し和歌の舍人なりし  
 文筆もあらはれし人同のす  
 来世もあらはれし又ら時違ひて天中  
 藤し

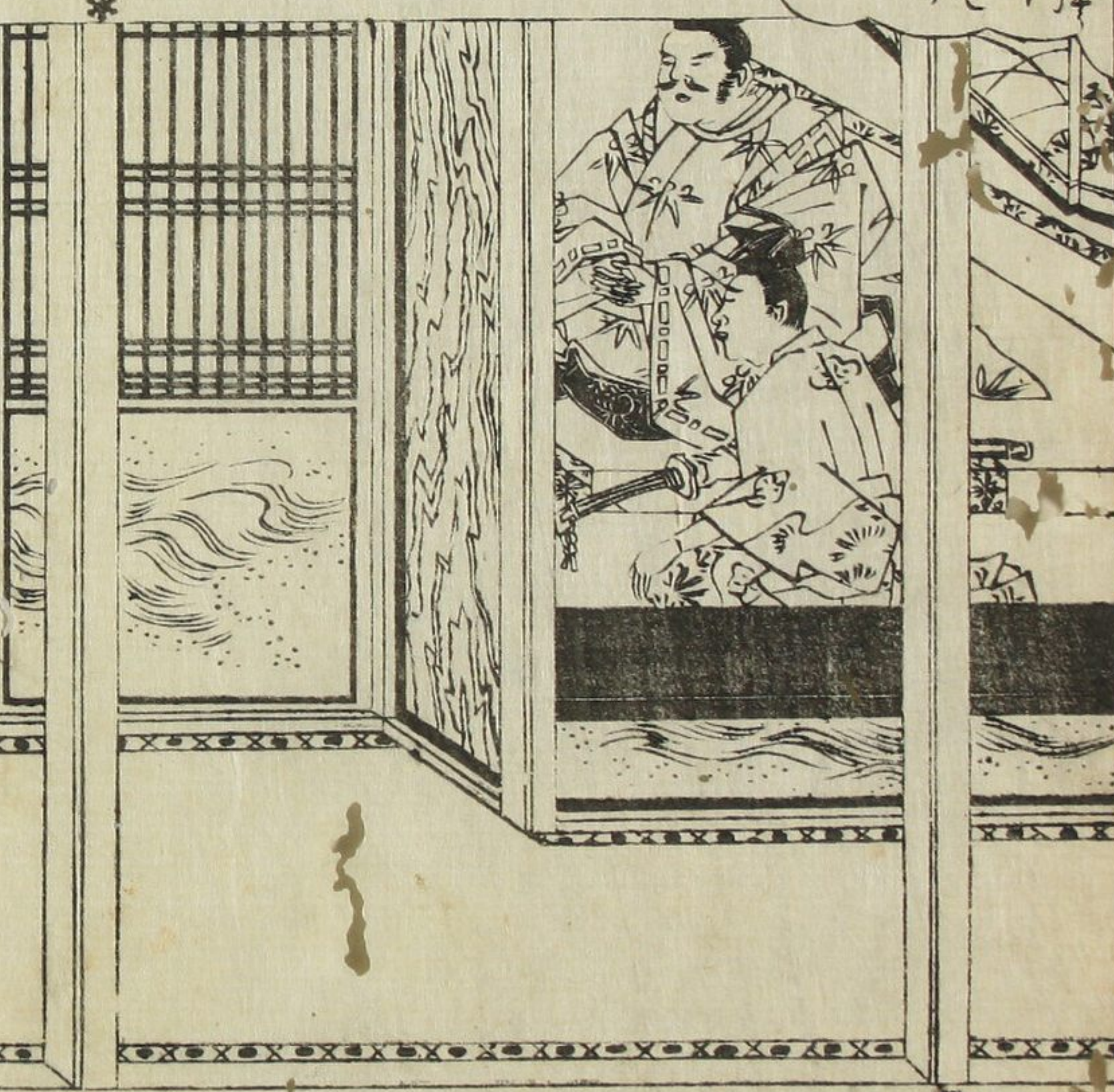
面々流し... 尊... 天... 西... 我... 刺... 世... 我... 其... 教... 天... 雄...  
面々流し... 尊... 天... 西... 我... 刺... 世... 我... 其... 教... 天... 雄...  
面々流し... 尊... 天... 西... 我... 刺... 世... 我... 其... 教... 天... 雄...

西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承...  
西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承...  
西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承... 西... 承...

福角  
 門前乃  
 新不  
 一く去  
 子  
 捨  
 黄金  
 塊  
 涼  
 人  
 い



鎌倉に右の将西行  
 とて馬馬の道と  
 とせられ  
 千里が月を  
 け飲の  
 ちと  
 うげ頼朝  
 ちよ  
 け悟  
 西行の  
 臨ん  
 如浪  
 描を  
 興ふ  
 是成





又文治二年八月十五日西行鎌倉御通らるる時頼朝の鶴岡へ参  
詣に老僧一人も虎のほろの御廻りありて西行より参りて  
梶原景季に以て名を問ひて西行と云ふに西行は和歌の  
らりしかる形約の奉幣乃ねん志の面々和歌の御廻り  
一信せしむる西行の御廻りありて西行と云ふに西行は  
ては絶やせられり形約の御廻りありて西行の御廻り  
まひ普中して所物語をりて教通并ら馬の御廻りあり  
の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
たしうりて保延二年の通世の時先祖秀房の御廻りあり  
相承しての兵治の書もしく焼捨の兵家の御廻りあり  
るは九月の御廻りて感の動きの折節ありて二十一字と綴り  
るは九月の御廻りて感の動きの折節ありて二十一字と綴り

の御廻りありて感の動きの折節ありて二十一字と綴り  
らすあしかりか恩向とけまきく答へて西行の御廻りあり  
不敬小僧は馬の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
りて西行の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
退ませしむる西行の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
白銀の猫の賜は西行の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
るは九月の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
奥州へ赴く順路ありて西行の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
衡入道西行の一族ありて西行の御廻りありて西行の御廻りありて西行の御廻りあり  
嘉禎年中北條泰時海野幸氏射礼は精きと云ふは西行の御廻りありて西行の御廻りあり

ひは西行の昔に射法と奉く射家の法則とせしむる又西の  
在俗の時とあり徳大寺家の家人がりりれい多幸修行の都(内)て  
手紙の君とてねりしははしなはたる大長法師の御りよた  
まかしく先外より入られぬを寝殿の柱に縄と張りまじり  
くまひくんとはひらきとせられぬとせしむるは  
だりしとてとておののけしむるはしむるはしむるは  
あしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは  
聖に付いて西の赴きし津島の寺に宿し入られぬは  
ひしあはれしはあはれしはあはれしはあはれしはあはれしは  
られぬはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは  
のりしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは  
はしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは

とらふはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは  
彼板とせしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは

連教にせしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは  
はしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは

又のの危  
都の

くらのすあはれしはあはれしはあはれしはあはれしはあはれしは  
はしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは  
はしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは  
はしむるはしむるはしむるはしむるはしむるはしむるは



林寺にほりてむすびくたは極らむと常の秋如如来の入滅の日  
早知んては福なり

神づつと花のりくはみかんのきくしきしから日の出

果ては果ては建久九年二月十六日七十一歳とてありけり

遠くまでいづれはみくたはたかの家納言喜持院二位中納言のり

わがわが

さら月のけをたうあやめきしとせのりかきり

二

とほかぬ

むすむすのまきしむすむすむすむすむすむすむすむす

はもね院傳はありハオ思天成りて常人のまひねるところは

らず人丸のほ身よりいづれはなまう西の家集と山家集とい

又市堂曜何歌合もあはれ合撰集あやの著述はうらんとも今世

流布するところれ山家集撰集抄もよはのへりまはるる

くる信りてさよめい又西の吉野は信りてさよめい其右伝を

昔清はもすの信りてさよめい其右伝を

~~~~~いさまの昔ほのぬほすほほむらゝ十のうれ

~~~~~いづれはなまう西の家集と山家集とい

~~~~~いづれはなまう西の家集と山家集とい

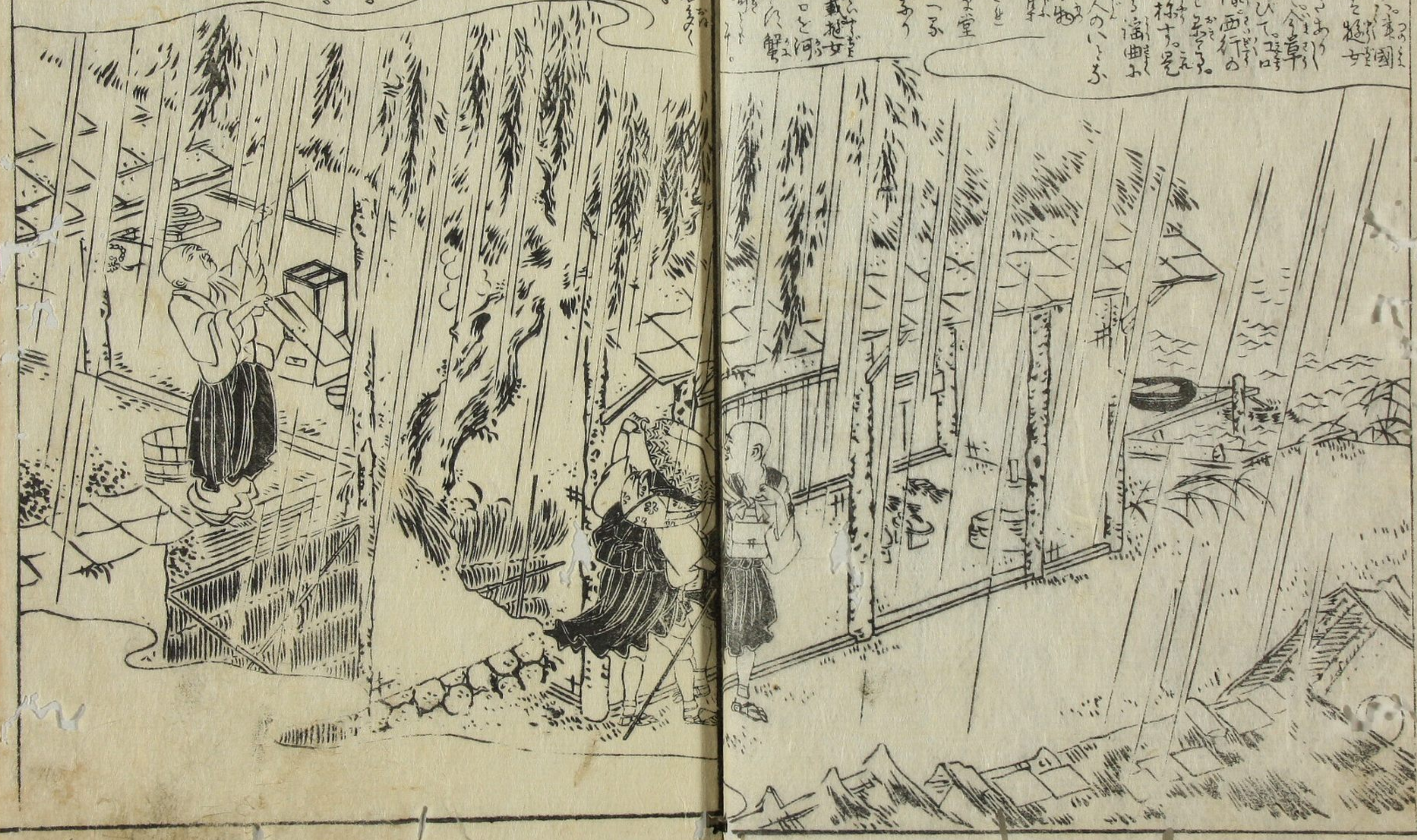
~~~~~いづれはなまう西の家集と山家集とい

~~~~~いづれはなまう西の家集と山家集とい

~~~~~いづれはなまう西の家集と山家集とい

江戸に在る朝野郡載起女  
 の記。江口を河  
 内は國の蟹  
 鳴。神楽。

抱女は名ま  
 あり。梅。今蟹  
 寫。江口。神楽  
 中。



又ハ醍醐の俊海河  
 園梨といふ俊成つ  
 の才ハ寂蓮俗の時  
 ハ定長といつ左中  
 弁中勢が輔佐五  
 位下し建仁二年七  
 月廿日卒す

寂蓮法師

し  
 ま  
 の  
 け  
 の  
 け  
 の  
 け

新古今集秋下五十五首の歌をよみし時  
 の意ハ  
 秋の夕  
 下  
 たるの

雨とよ

寂蓮法師の話

寂蓮ハ俗名と定長トシの俊成の甥  
 養子トセられし定家トシの長子トシ  
 才智ハ  
 橋も秋も  
 才思ハ  
 博識  
 寂蓮ハ  
 のハ和歌  
 其故ハ

我教は堪能か... 又我教人の... 似す... 季経つれ... 我... 同... 評定... 寂蓮... 鴨長明... 蓮予...

ぼくく... 大の... 蓮予... 可... 秋... 我...

順徳院...

かくうさる寂蓮の卒せりの所定家つらりの記録の明月記よ  
 ちりしやれり其文より建仁二年七月廿日午時御所へ本上す左中  
 辨や輔入道寂蓮逝去のしるしに依りて退す所の趣輕  
 服す依りて今ふ我はく哀傷の甚し禁しし一幼女の昔  
 しくく相馴ししや数十回とんや和歌の道はたかく傍筆誰人  
 たりんや已むはく奇異の逸物なりとてふれりて定家  
 子らに依りて寂蓮の重きとてしるしをいへり

皇嘉門院ハ崇徳  
 院の後より大治三  
 年二月より皇后  
 久安六年二月の  
 院号に改まらる

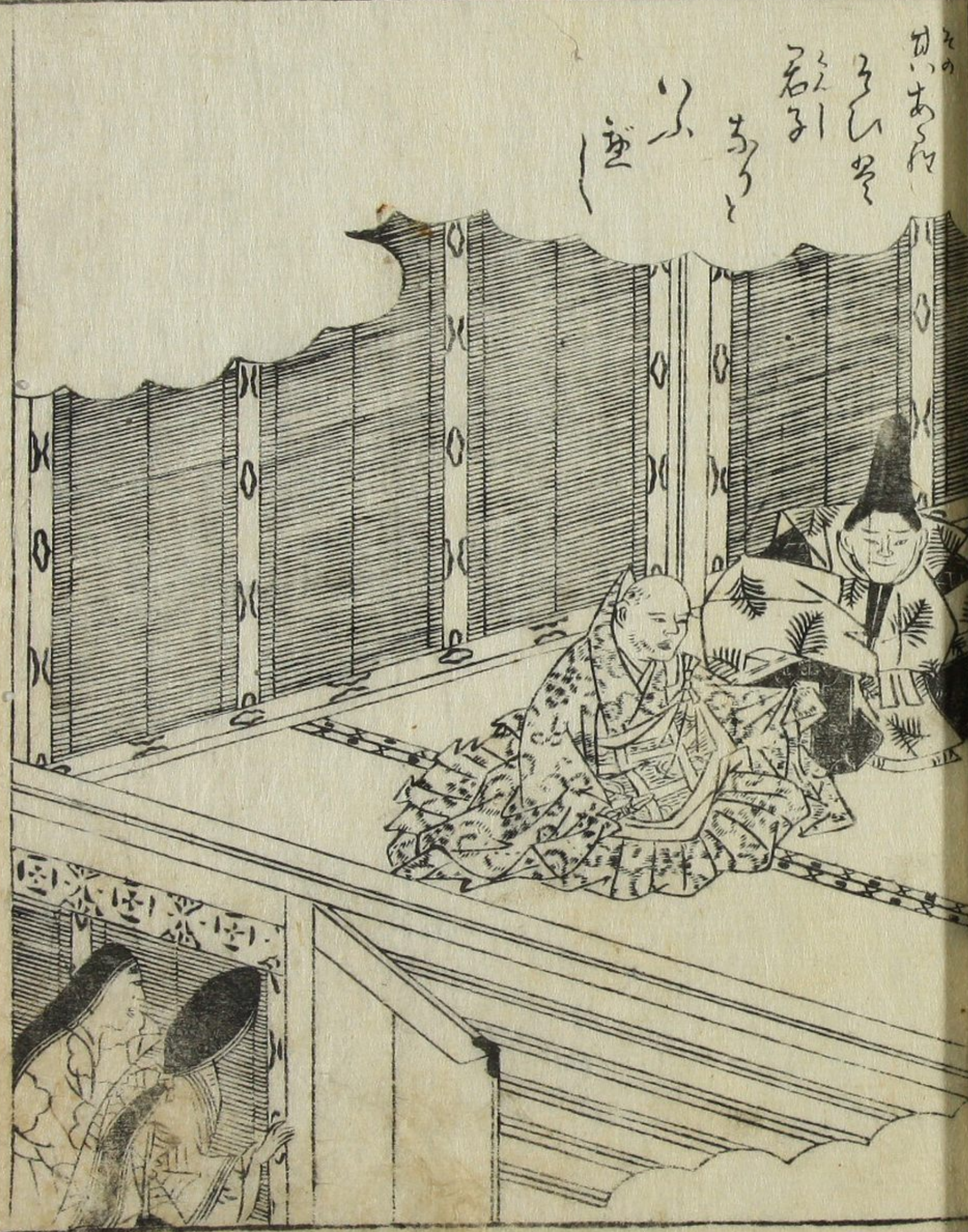
皇嘉門院別當

けははのあけぬり  
 ひろくふたつたや  
 恋しふ物なり

千載集恋三は按ぬ右大佐の耐家の歌合は旅石蓮恋  
 といつらん相ふあつとけしは按ぬはねけけ入道  
 前関白大政直實公のしるしとて実公す右大佐なりし  
 時其家より歌合せりし時の歌の意ハ津國の







かの  
 あり  
 名子  
 あり  
 逆



狂周堂觸の多し  
 列子が鄙人た各  
 俱ふ喻を執せ  
 上は名利はあ  
 下は心はす  
 寂蓮 歌の  
 和奇  
 評下  
 一を  
 小い  
 ひ  
 日

後白河院の御母  
 御母六位  
 成子一丁大納言  
 季成子の女は白  
 河院白河二人  
 御母の白河  
 富門院  
 の白河と式内親  
 王

式子内親王

玉の清まだかな  
 かな  
 かな

新古今集恋一は百首の歌の中  
 恋の心  
 玉の清まだかな  
 かな  
 かな

かな  
 かな  
 かな  
 かな  
 かな  
 かな  
 かな

式子内親王の話

内親王の御母  
 和歌とよ  
 齋院紀  
 嘉元元年  
 嘉元元年  
 職と  
 都の外  
 承如法



ぬきてはかへし神のやう血の涙なるまてこのつらさひがし  
けなほまめをてしのかさう神とよめさなきよえせ  
やう上へてし涙のこぼる血の涙のくさるの歌  
あゝまよえし涙のこぼる血の涙のくさるの歌  
あゝあゝ血の涙のこぼる漢土の故事よく周易も注血連如と  
らゝ又韓非子は楚人卞和其璞と抱て楚山の下に突すと三日  
三夜涙盡てふよ継よ血を以てすといふ

殷富門院大輔の話

白河院の白子殷富門院ハ侍名と亮よとてたてあめり守  
徳天皇はも相院二代の准母として順徳院の養女となりて  
まゝり文治三年六月門院号被りて建保四年四月に崩れたま

へて中母ハ位成子とて又納言季成のむすめなり大輔と  
り門院はけしきまじり官女まゝ祖父ハ白河院の判官代行憲と  
いひく高藤公のはし又ハ從五位下信成といふ一説ハ信成ハ名説  
輔といひりし信成むすめなりはては殷富門院の播磨といひ  
妹ハ同院の大輔といへり

良經公指中納言と

歴三位を叙せられ

建久元年於大納言

轉せられと病

よつて官を免れたま

へて同六年起て内大臣

任にたり 治元元年

大臣に轉 建仁二年

内院と蒙て同十年

二月移御しかり元文

元年正月匡一任回り

上月左大臣と辭し

同十二年大納言と

後京極攝政前太政大臣

いと守がしや病よの枝

ほどふらぬをじよふらぬ

もぬじ

新古今集秋下百首のこたてあきらし叶い歌の

ころはきりくす秋の末冬をめぐりあきらめを床の下へ

あきらめのなまきりくすのなまきり夜のこゝろのうらみの

ねの寒きふゆはけふの衣ひきてはねをすれ片一方の秋

下へあきらめ秋の末は夜寒の頃をぬすむゆめのし

やもせぬさるる万葉の歌よ

我こゝろ妹の何をさるる玉はさるるささるるささるる

しつ下向合合の御沖は秋を引く万葉はひらきものな

まは下向合合の御意えたまふけりながらさるる万葉の

万葉の白紙用からさるるさるるさるるさるるさるる

さるる

さるる

後京極攝政前太政大臣の話

後京極殿内名良經といふ祖父法性寺忠道公父法性寺重



賢能  
の士  
巧造  
と  
人  
と  
新  
と  
か  
か  
ま  
ま



不  
和。漢と敵に。人石也と  
も。新二度。遊み左の  
足と加も。信而。  
漢のい。い。漢。  
見。心。心。心。心。  
新。血と。心。  
こ。ま。ま。ま。ま。  
を。韓。非。子。に  
如。く。彼。の。轍  
退。之。が。心  
乃。乃。乃。乃。乃。  
ま。と。伯。樂  
か。か。か。か。か。  
か。か。か。か。か。  
か。か。か。か。か。

定公母八從三位藤原秀行の女しなると院の建久二年六月長経公左  
大納言の時源宗能保の女嫁娶せしむし源頼朝使とてけし其  
婚礼と冊立して四月九日乙酉月帝少位と皇子為仁は謀りたまはつ湯帝  
考仁君初立と皇太子とせんともひけし長経これと拒み果  
ふりしは今年より謀と定めく位を譲りせなつこれ  
と土師院ともなり時長経公の誓書はゆりか位は後内大臣  
えのめ長経公のめも和歌よ長しはひひははるは上皇歌  
ゆりか推重しなつたるは建永三年三月當今土師院長経  
の亭へめまはせたりんとらるれも長経公門牆館舎と備修理  
嚴重し御駕と侍もせり何者もあはす長経公の寝所は  
思ひ入天井と槍とこしおろ突殺しけり去りか帝甚惜と  
かたりませしむし詔し其盜賊とあらはく搜し索めしめれ

すも終に捕へたりしつうは捕したる況り日本史の細註しそく  
世傳に良経一夜寝就き天井より槍を降しこれと刺し何  
の志ともしつうはあつ十一播紳家の藏書に曰くこれ菅原為  
長の所著とす其代ふつは志せりしと長経十一世の孫開白  
政基菅原在敷のりし書籍は借たまひしよの書籍の逢際  
よは系抄と殺し志と違しやとて数字はつれはけり  
お長の所著なりしは知し直に在敷と召くこれ殺して以て  
先祖の雙言と報せしつうはあつたるも親長記に授くは明應五年  
白政基在敷と召く其無礼と責其子尚経と共謀りしつうは  
殺したまつたあつた良経お長の相あつたつた蓋長経の  
暴を賣せらしつうは傳説終つて其つうはつたつた  
相付ては建仁元年新古今集勅撰の節菅原為長其序とす



一、良経公の御押入御成りなすは長城と  
 人としておのれ殺さしむるも良経公の家集と月清  
 集よりふら平生讀歌の作名とせられたるは秋篠月清  
 公の御成り又御書の御成りしてはせりしるは京極様  
 御成りしるは道家教家基家とせし

二條院讚岐

神の御成り  
 沖の御成り  
 かきまな

二條院評と守仁  
 と守仁は白河院  
 第一の皇子と守仁  
 八皇太后宮懿子と  
 中大納言経実との  
 むすめと保元三年  
 所子とす即經  
 長子とす方と七  
 月所子とす二十  
 崩したる

千載集と二寄名述  
 千載集と二寄名述  
 千載集と二寄名述  
 千載集と二寄名述

おでうの丸さぬき  
二條院讃岐の誅

讃岐は二條院の官女一と源三位頼政のむすめし又の杉政ハ参河守  
頼朝の孫兵庫頭仲正の子一と源頼光の商しりしう馬のんは  
達一と和歌長せり近衛院の仁平三年四月禁裏は極もつり夜  
こはやく殿上ととれをくんと怒くしうふり上中恒  
つりりしと醫侍もよきしなりしを杉政令下しりしを射  
しめゆつりしを杉政しりしをゆりしりし高倉院の治承四年  
四月は謀反せり其故ハ先ハ杉政の男伊豆守仲綱良馬と飼りりとの  
名ハ本下と号けりてははらふとをけり平宗盛ハ杉政を  
してハ杉政をせりし仲綱は惜しりしハ杉政ハ平宗盛怒くしり  
請くやまらりしを仲綱止る所はすハ杉馬と宗盛ハ怒りし宗盛

其贈りしもの屋敷怒く彼馬の名の女下と改めり仲綱と号し其  
名と馬の背は焼きしりしをハ杉政ハ馬を飼ひてははらふとを  
仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりし  
杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては  
頼政ハ杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては  
執事ハ杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては  
不平のんハ抱きしりしを杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては  
者ハ杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては  
誅ハ杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては  
大義と名ハ杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては  
すめハ杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては  
ハ杉政ハ馬を飼ひてははらふとを仲綱と号しりしを杉政ハ馬を飼ひては



信連更  
 居せし  
 大言す  
 言皆忠  
 節  
 宗成骨  
 勇  
 人  
 園固  
 中  
 撃  
 偉  
 令  
 全  
 子  
 孫  
 血  
 食  
 宣  
 子



高倉此官所謀互為  
 見一は頼政父子守  
 護一なりて三井寺  
 人東西離教も獨  
 信連憤然として踏止  
 無率に競來るを阻  
 猛勇にけけ拂ひ  
 平率に倒す  
 多勢官中も完  
 信連と  
 官女二人を生捕  
 六波羅へ送る  
 屢鞠問ふ

女納言惟長しりしりとのきて人相を定めぬも時の人相細  
 言しり頼政ひるまは侍謀り相徳のりといひて洗きり  
 ちのれ君の階面と見えまはすし帝王の相ありやすま天下の  
 の何うなるかやとてやまふりやちてめて断を決し中しけ  
 出の頼政大に頼ひ十郎の家をいへ倉士の令旨を折めく  
 同東の赴しつれ家東園下するまの令旨を侍りし頼政  
 寺の源氏まゝにあしりんすすの侍くはついでに洗きり  
 都の風すむりれ半清盛大怒りすれら三條実房頭辨光雅  
 等とて二百騎よめ高倉を採捕へりて遠國に遷し  
 其後黨を誅せんしり頼政をこれと知りて使する倉  
 駒とてなすまにり頼政を三條とてせりや  
 長谷郡信連一人苗子とて殿をてる官兵とて困む信連防  
 戦力とて人相殺すも野一いも多勢は敵するも断す  
 しる逢はるるしりやれを官兵とて馳令搜しめりれし  
 むは子とてあしりしは信連の宮子とて採捕されぬの館を  
 圍み残る苗子とて海邊競争を捕へれば羅て還る宗盛信連  
 引あししめ謀及のりや問は信連に承りて其しきしり  
 りれと清盛とれ頼政とて信連を勇氣と感し其罪を免す宗盛  
 又競をめり問はるしり侍れ頼政とてあしりし其家  
 苗子とてやち競しりて曰くは人相ぬけりも然るやしり  
 残り苗子のりし宗盛といへ侍れ頼政とて採捕し相徳と  
 頼政とて頼政常と我と競ひて密に頼政とて採捕し人相ぬ  
 其恨がまはりぬきし頼政とて向は君とて侍りて勤を侍  
 けんと宗盛大に侍れし侍れ終日側侍りて侍れ

日の暮るるに及く競字盛なり申領りて一疋の良馬とゆりて  
らる我馳付くねぬと討けん宗盛すれを良馬と引けん  
あ競直り其馬を疾馳く三井をいりすれを其馬を仲  
佃へ献小れを仲佃大悦く驚とさりて平宗盛の三疋を馬  
の背に横下りてこれに波羅を放り宗盛これを見  
悔ひて一も及せずして倉入三井を入せたりと  
不勢なりりれを書紙敷山真海を備へて援兵と  
敷山の衆徒はこれを見す真海を宗盛の軍に  
かへりて果はねれぬ相討し三井の地狭く其兵  
かへりて敵とすはけん謀りて南都へ入りて決  
せん南都は越へて節々軍のまはりて二夜りひ  
れと身心勢を以て疾く馬を乗せし法を三井を宇治の向  
そ七なる馬は其疲れを養ひし人あ平  
院へ入る息にせりて討法盛知盛忠度重衡業作  
餘騎のわくこれに追撃し平軍身宇治川  
漲り流せりてあ宮の軍早宇治川の板  
岸は狭く陣城を平軍猶豫くこれに敵の板  
この石竹筒井の淨妙一來法の業城  
平軍一隊し其輕捷西軍の目録をせり  
は十七なりし平軍を魅へて入りて逃  
家の万平才勢以備く續く向とす  
の山をこれに流せりて陸地のあ  
の石竹筒井を今にこれとす万死を侵く血  
敵す

日暮るるに及く競字盛なり申領りて一疋の良馬とゆりて  
らる我馳付くねぬと討けん宗盛すれを良馬と引けん  
あ競直り其馬を疾馳く三井をいりすれを其馬を仲  
佃へ献小れを仲佃大悦く驚とさりて平宗盛の三疋を馬  
の背に横下りてこれに波羅を放り宗盛これを見  
悔ひて一も及せずして倉入三井を入せたりと  
不勢なりりれを書紙敷山真海を備へて援兵と  
敷山の衆徒はこれを見す真海を宗盛の軍に  
かへりて果はねれぬ相討し三井の地狭く其兵  
かへりて敵とすはけん謀りて南都へ入りて決  
せん南都は越へて節々軍のまはりて二夜りひ  
れと身心勢を以て疾く馬を乗せし法を三井を宇治の向  
そ七なる馬は其疲れを養ひし人あ平  
院へ入る息にせりて討法盛知盛忠度重衡業作  
餘騎のわくこれに追撃し平軍身宇治川  
漲り流せりてあ宮の軍早宇治川の板  
岸は狭く陣城を平軍猶豫くこれに敵の板  
この石竹筒井の淨妙一來法の業城  
平軍一隊し其輕捷西軍の目録をせり  
は十七なりし平軍を魅へて入りて逃  
家の万平才勢以備く續く向とす  
の山をこれに流せりて陸地のあ  
の石竹筒井を今にこれとす万死を侵く血  
敵す

寡きハ衆より教せりて其の軍大ニ敗せり仲綱全勇無備仲  
宗及ひ六條藏人仲家等思ひて討にけり杉原も自殺せり今  
七十五さいハなかりしや又ハ其まゝハ南都なんと派はりてあはれ平軍  
これ派はりし雨の如く夫れ射りけり其れを仰あやむ中ちゆうにけり  
たつち中ちゆうにけり杉原も自殺せり杉原も自殺せり  
し風流の才さいを以て其れを以て其れを以て其れを以て  
倉くらも其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て  
けり其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て  
おし其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て  
めり其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て  
もれ其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て

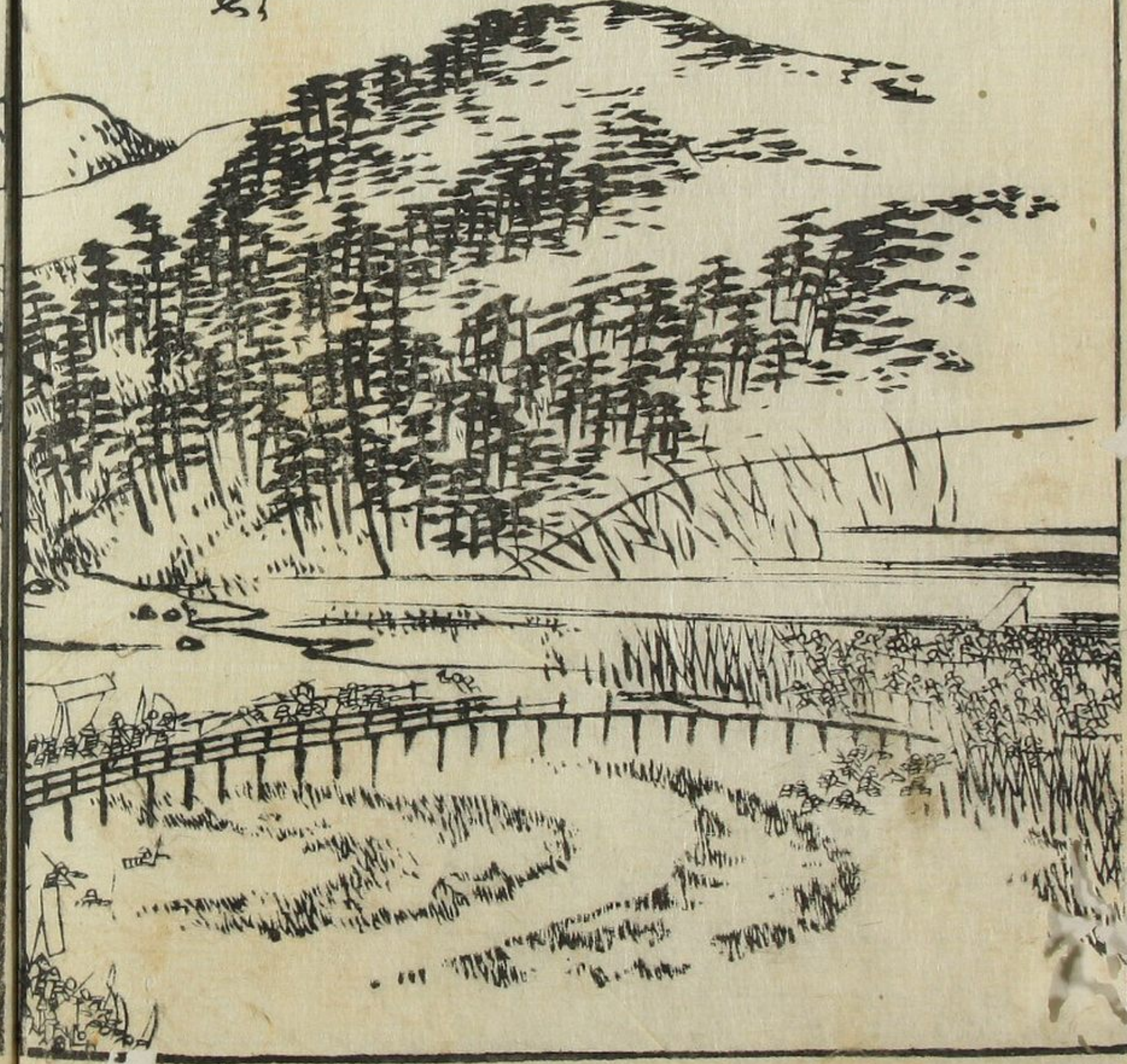
實朝公建仁三年九  
月後五位上の叙  
右夷大将軍補せ  
り建曆三年二月  
三位建保四年六月  
中納言同六年十月  
内大臣同年十二月右  
大臣左大将元の如  
同七年二月薨す  
小二十八さい

# 鎮倉右大臣

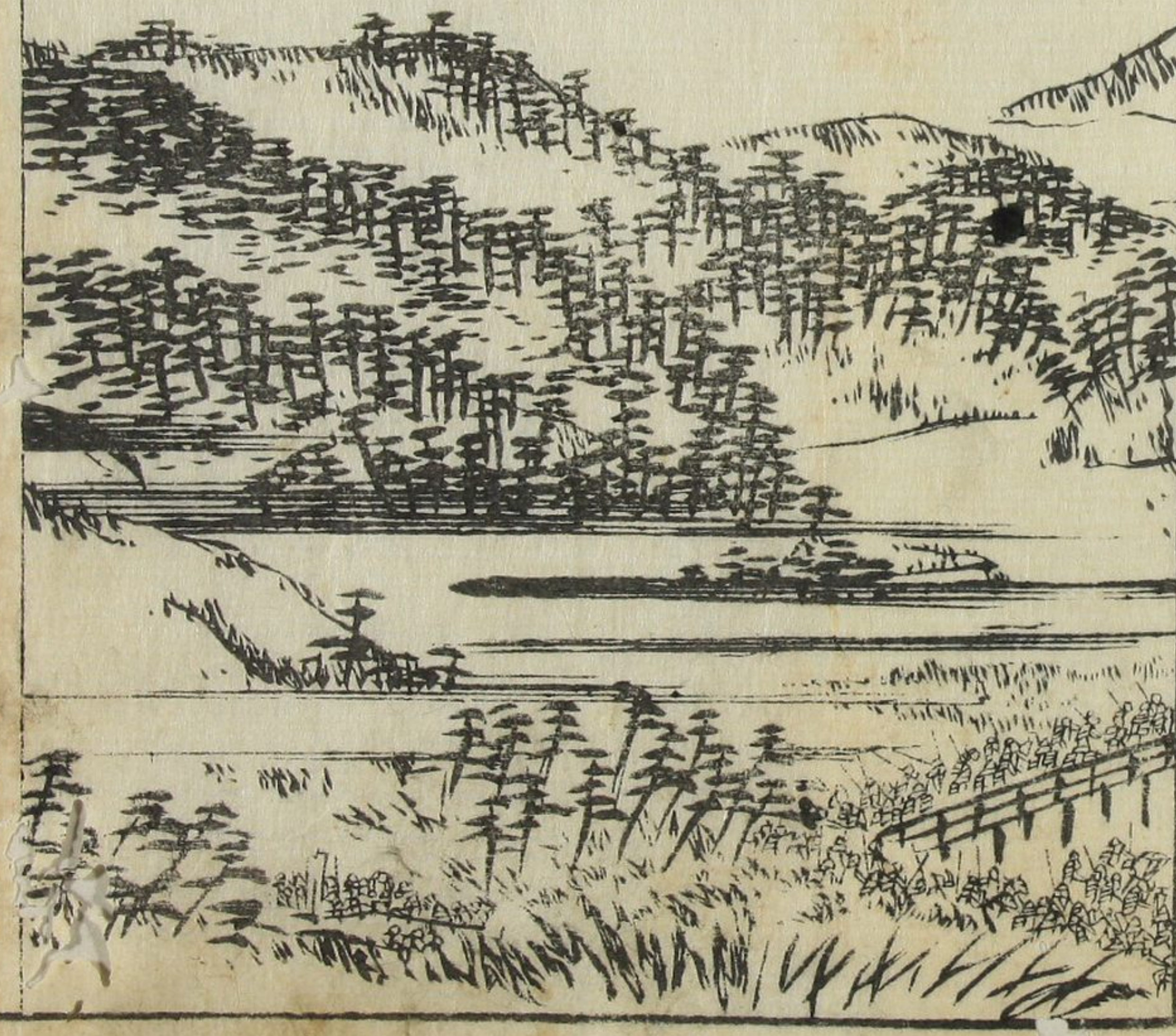
世のなほいひまゝ  
清くあまのまゝ  
けりなほいひまゝ

新勅撰集羈旅部は題ありす其の意ハ人回世界  
いひまゝもこのまゝもあまのまゝもあまのまゝも  
清くあまのまゝもあまのまゝもあまのまゝも  
あまのまゝもあまのまゝもあまのまゝもあまのまゝも

賈誼の過秦論  
 殺敵の國  
 據雍州の地  
 と擁ま  
 治勢田將  
 之城の殺敵  
 ふう故小師  
 成交る其  
 橋を引平  
 古より教  
 進ふ利を



東を吳越  
 螺引と西河を  
 降和嶮にあ  
 徳と其は  
 千古は  
 各言



解能  
 芝  
 け  
 おけふ  
 こころを  
 へん  
 昔の  
 下は  
 せの  
 へ  
 あついに  
 隆々





あはほめく感すらくすくはる景のよき所とて  
いひもててわらふ合まてていひもてて  
万葉集の古風既万葉第三の帥大伴の秋は  
吾のちもほひのけぬ昔の事とていへんあ  
とよめいれのこし

鎌倉右大臣の話

土御門院の正治元年正月は征夷大将軍源頼朝薨せられは嫡子  
頼家十八歳して二代の將軍なり頼家の母は北条時政の女ぬみなり  
頼家又頼朝の業成体なりと宣下被蒙りて諸國の守護をまけり  
すもてても性質懦弱して誹謗を起し賞罰をゆるはずなり  
鎌倉の宮中へ行く回四月新の問は所と造りて善く信と執筆職

て公事を決せしめ又時政廣元善信并は三浦義澄八田知家和田  
義盛根原景時比企能員藤九郎盛長等とて政務を執りしめ  
らりしれとて天下大小の政を盡くし輩の計議を決せりて頼家又  
小笠原弥太郎比企三郎同弥四郎中野五郎等の四人と出立して  
常備と去りてめす其外は古老の家来といへばたやすんや  
許されりしれとて彼四人の輩驕を恣にして威を鎌倉に振つけし  
なり四月七月頼家は主景盛の毒の艶をいひて其文景  
盛を参州の盜賊の討ちよけり其隙に中野能成と景盛の家  
にりて彼妻を奪りてて宮中へ入りて景盛を殺し成をけり  
其妻を奪りしれとて不平の志を抱きし謀反の志に  
鎌倉に流言しりしれとて頼家これとて彼四人の出立  
并は大江廣元等とてこれを誅せりて廣元といへば昔の事なり

源仲宗季松奪ひて宮中又とせしむる祇園寺所ふ其仲宗と  
 隠岐は流るるあれを已は其例はるるや景盛は先將軍の時  
 已本當家は丘侍に恩沢を蒙りたるは一人のゆかりは  
 君松恨にやうるは外のは早くこれ滅する志しとて行て  
 頼家急き兵を募り小笠原次郎と相と景盛館を困やん  
 とせし母のぬきとてとてはしむ趨く景盛館に入たまひ  
 使と馳て頼家と決めらるるは古將軍他界のな悲歎し止ま  
 油しは戦い事しを好むこれ乱世のをと啓くもの早  
 の所思止まらるるは母も景盛とたふらんやせらる  
 せけれ頼家母の命りかして兵松止めし事しとては  
 佐と本盛綱とつくさひ頼家と決めくの時しは母は先將軍  
 の基業とつけしはるるは民の苦く候るすす

恥し世の謗とらうす其は左右近侍の輩とて新傳よし  
 おのりつひの共とあり譜代勲功の士松次人す故忠賢の  
 筆心の恨と含むるは錦りの今より其のひとぬく  
 むらふれ頼家謹く命りけたまひしはらるるなり  
 其のひとぬくは十時諸士連書して頼家景時罪を頼家海  
 りれも景時鎌倉と奔り其領地は相おのり花は  
 二月三月一族とあつて返送とてりれ其のなりすしは  
 伏せり其次の手建仁元年二月城甲郎長後謀反しは  
 伏せりかくはと山道及道の輩相はきく起しは頼家  
 の裁のつてはるるは北条泰時とてはるる  
 流しとも聴きすあるるは八月將軍頼家病をりて医療り  
 ちもはるるはるる軍の積と辞し天下を以てに

関西二十八箇国を以て才の實能のゆゑに達坂園と域として坂東

二十八箇国を嫡子一幡君と譲りて一幡君は其の時に一幡の

外祖比企の能員と孫と一幡とありて二十八箇国の主とされ北條の

恣がしつて一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

減らん折しも禅尼政子障子ののりなりはのこりて

ついでりれといふや父の時政は告りて時政大に驚きて大江廣元并に

仁田忠常天野蓮景等と相誼し兵を發し時政を討つて時政

蓮景を討つて時政を討つて時政を討つて時政を討つて

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

何れも一幡は其の時に一幡とありて北條の一族と

主とす實朝と十二歳に征夷大將軍に任せしむる實朝ハ  
れおの二男として童名ハ千幡君といふれお曰くぬ子の腹に  
せしめておのれおと三州を配せしむる勢をばいし  
せんとおのれおの害をせんとて潜りておを殺しけりて頼  
家と害せしめれおの病死せしめしむる世にのりて  
おのれお家二十とせしむるおのれおの家へ等六と  
怒り憤りて謀及せんとすし北条義時武士とみ余しとありて  
けりしむ聖二年六月おのれおの妻牧の方義時時房とけりて畠  
山重保亦其又重忠を殺ししむるの起る去る十月坊前大  
納言信清のむすの系より鎌倉より下向しと実朝の室とけりて  
北条政範及び畠山重保等上洛しておのれおを討つるおのれお  
源朝雅おの婿として其持としてしむる諸士とあり

重保の魚札と怒りて朝雅と辱しめたりておのれおの  
方鎌倉よりけりておのれおの怒りて重保及逆の企てりて  
おのれおの妻の伺ひておのれおの怒りて義時時房と  
重保重忠と殺ししめしむる義時時房伺ひしむるおのれお  
重忠ハ治承の末の忠助指と折しむるおのれおの妻  
先將軍の忠実と堅けりしむるおのれおの妻の遺恨  
おのれおの故と以て不義を存し逆意とすしむるおのれお  
頼りハ実否にせしむるおのれおの妻の遺恨  
いしむるおのれおの妻の遺恨と怒りて備前守時親とけり  
りて義時時房とせしむるおのれおの妻の遺恨  
君のお家のおのれおの妻の遺恨と怒りて備前守時親とけり  
て逆意とすしむるおのれおの妻の遺恨と怒りて備前守時親とけり

國道ありては忠臣  
 像者れ古蹟に如く  
 けいとう 魏碑 碑  
 ありては和漢の  
 たりては ありては  
 天章 之 臣 子  
 報す ありては  
 うれ ありては  
 共子 威 威 後  
 史 松 子の せ  
 芳 名 之 仰  
 秦 乃 趙 高  
 宋 乃 捧 櫻  
 如 き 之 尺 の 寸  
 ありては ありては



小 条 義 時 が 好  
 悪 あり 重 忠 子  
 如 き 忠 臣 哉  
 吉 野 子  
 遊 記 ありては  
 ありては  
 ありては  
 ありては  
 ありては



了かつていふせしめしめ義時房止む所すこよれ了け  
時重保鎌倉よりいふを仇久間其とてこれ計りしにやま  
邊 自殺せし義時房房重忠とけんふは大兵奮しく武州の二  
侯河軍ならす追國の軍士旗標荷い兵糧と齎しく鎌倉の軍  
房いれ軍卒山谷光経旗村野松敵了重忠公平実の罪と陳  
ふあは兵百と十騎と鎌倉を越えしと道りて討ち已し向  
ついでとき重臣本田近常橋沢成法重忠に向のりり今今途  
中へく討ちた大軍を出合りは一騎百騎とあふとも我兵勝利と  
はんも破る一兵伐ふふふ付ひの勢いあはれしく我いさう  
んもりれ重忠の曰く否仰す山治の軍は梶景景時一のみの館を  
返りく中途へして休めしれ暫時の令に惜むも似しとて  
り今敵軍大なりと兵とて勝負の可否はたしかん実人

逆の志はるゝ似て一は重忠逆臣の名は蒙りぬなり了れ  
引約の事目ふとてとらひは似りて其よ小勢を敵軍より  
義時房大軍は約してこれに圍ひし重忠のり百騎と左  
右へ挑み我し討ちの軍兵と殺すも其まのり大軍は支  
たすはすくはし愛甲と郎李降るあは命と預せし忠  
時四十二歩せりし重忠の重重秀并は近常成法とこれ共  
討ちしをも残兵もあし討ちしは故義時房兵を引渡し  
うれりかくて投の方ハ重忠重保を殺しても毒惡のんれや  
いど八実約を捕もたきよの婿の朝推を立く將軍とし  
持勢は振んもあつて山時実約の討ぬの館をおとすも  
思ひ討ぬもかゝる企てせしあはぬもはりて  
大と考き俄に長沼五郎宗政結城七郎朝光をけり將軍に

義時の専らむ之移るは時政悪く此陳る所より殺せり  
剃髪し其妻もも北条の執事今(一)十八歳と云ふ  
時五條判官有光後藤基清佐木盛綱等が京に居りて朝権  
を殺しめ鎌倉へやて相模守平義時を以て執権として將軍と  
輔佐せしむ今年実約の家人朝親よりものふり鎌倉へ  
新古今集と献す実朝甚れを悦び此集奏法を經くは  
故に竟寧は及もすし実約より定家の子子  
和歌と好ま且集は和約の歌を採入せしむるは以て志き  
人々が希りあり所定家つ和約より採りて  
翌年建永元年十月實朝前將軍頼家の子公曉を猶子とせしむ  
初の名は善哉とす和家時政の孫とす  
いふるは和政より和家とす鶴岡の社司尊曉の子とす

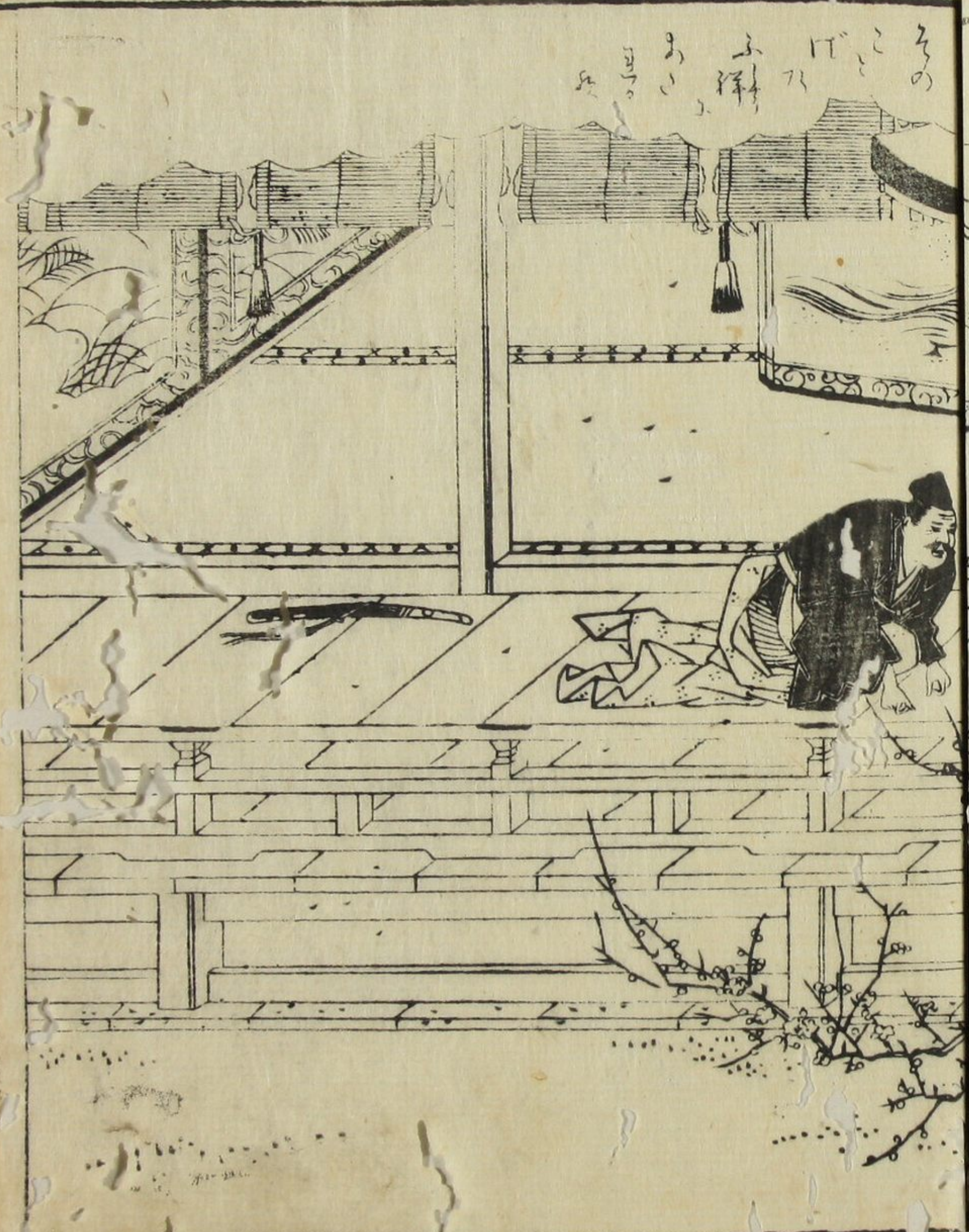
剃髪せしめく名は公曉と改めしなり  
らひく實約の孫とすなり其後建保三年北條時政七十八歳にして  
豆州の奥山平す甲子四年六月宋人陳和卿より鎌倉へ來り  
實朝の伯す陳和卿八丈ありりり日やよめく東大寺の大  
佛造りしなり其時頼朝和卿の法徳を仰ぎてくわたり  
えんしりあり和卿辞謝しく曰く君は天下草創の主として人  
令絶たすなりといひりりれ吾輩謁見を許さず  
遂にすえりい今(一)殊更に鎌倉は宋人實約の謁を許さず  
けしき實約大に喜ひて和卿を招き和卿實約をえり  
りり實朝も又各拜せし和卿曰く君敢て吾輩拜し  
れ君は前生くは山に經りて其時吾前生くは  
青子たり故に今日も君はねり身道の道書す





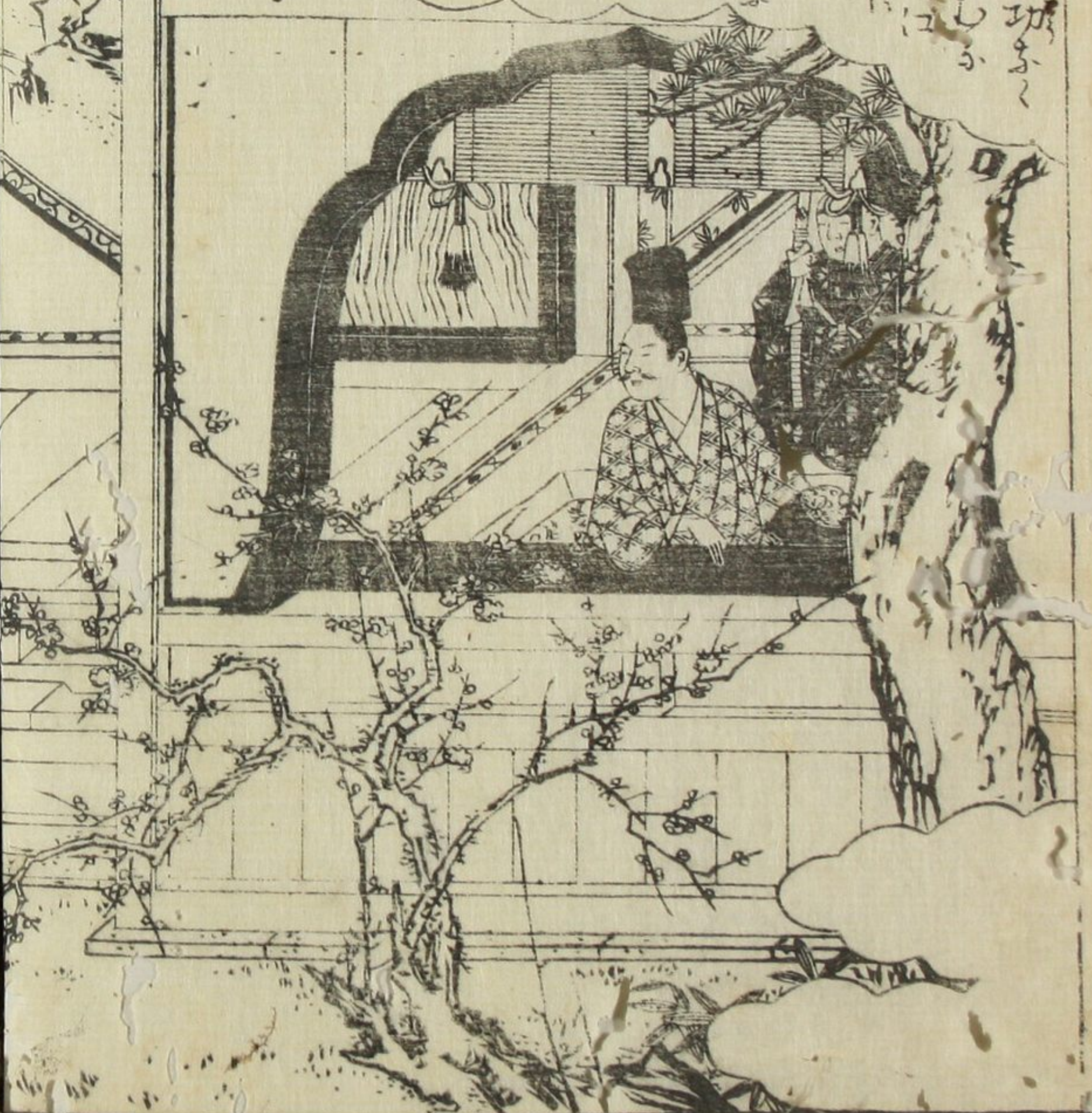
らのたす和御令とけつ夜夫と督し置夜候りてしりする大船  
 つながりてさうろの費敷百金とて大船成就しりて由比の浦  
 船おろしこれに漕試んて実朝公所沈の模範と播らの厳  
 重くして教百人の人夫と小申れてこれに夜更卸さんとてひ  
 重く造りし船なるあやうく地上と離しゆれて止りぬ  
 其大船は往由比の濱さうく朽たさうてさうて今年正月先づ  
 まのまゝひして実朝公の御りせられしを呪と持国の別當  
 浦やれぬらそを呪頗不平の志と抱けて聖二年ぬまに二役と授  
 らせりてあう二役後尾と稱す所は今年十二月実朝右大臣  
 任せしをりしを聖二年承久元年正月実朝右大臣拜賀のお鶴岡  
 八幡宮に信たさうて都より大行言藤原忠信中納言藤原  
 実氏等とてあう婚姻好らうと録倉下向りて大廻船と

りりぬ○くは泰の日辰擇りぬたさう正月廿七日言の別とて期す  
 叶々廣元やううう大切の所奉を夜更し月ゆき不慮の思候は  
 晝の儀は定めぬ然うてさうて文章博士源仲章かやうの儀さうて  
 う必夜降と用ひてさうてさうてさうて今今廣元もか及さうてさう  
 りてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさう  
 廣元人さうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさう  
 さうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうて  
 さうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうて  
 供養の節所將衣束の下に腹巻を着させらぬ例もさうて一は是水  
 所用心の腹巻候もさうてさうてさうてさうてさうてさうてさ  
 大将より昇りたる人の腹巻候もさうてさうてさうてさうてさ  
 は廣元重なりさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうて



その  
 けり  
 不祥  
 あり  
 兵

實に朝庭より  
 而も官を  
 年祖先  
 度え  
 な  
 酒家  
 小  
 官を  
 衆の  
 じ  
 氏  
 む  
 後



梳めたる実物を手取り、髪の手、二筋のきくこれ、記念也  
て公氏は賜り也又、その地の在りて、

不祥の秋、なつて廿七日の暮、南門と北門の時、

随兵の、銘、黒未威、小櫻威、萌黄威、藤威等の鎧と着、

騎の武者、二尺の積り、酒酌り、出陣、鶴岡の神、

外は、良きぬ、実物、八幡宮、室前の石、

過りたる、思ひ、石階の際、

衣をかきた、女、将軍、

帯、太刀、次、

具、文章、博士、仲章、斬殺、

騷動、大、手、時、義、病、中門、外、退、

第一、番、武田、五郎、信、

り、一、の、敵、

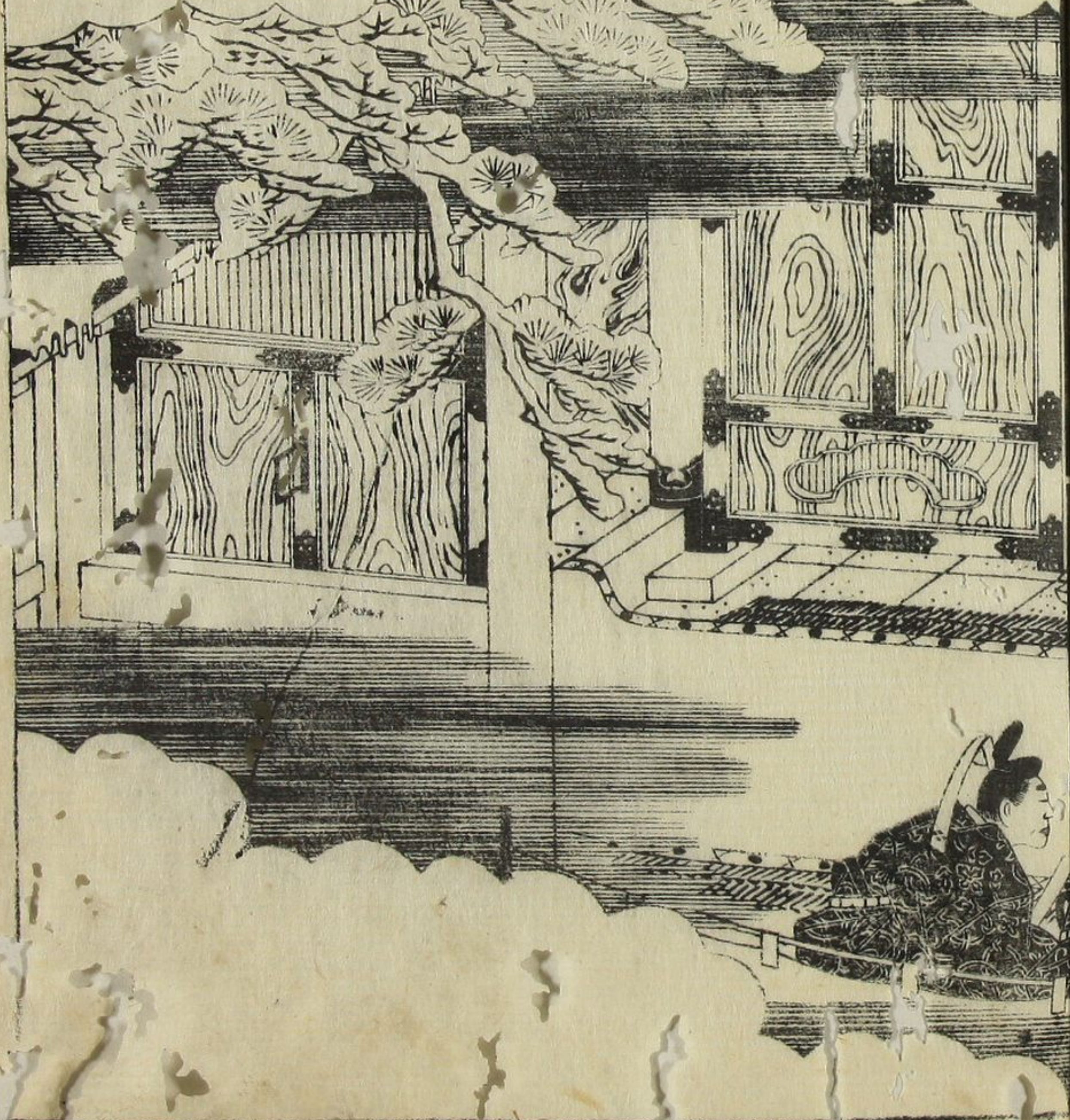
声加ふしちらばやふふままだしりかひりけはるそ八幡宮の別當  
せよたつと曉阿圍梨の所五かりしを我つとよの公曉の雪の下の子  
坊へ押せたりけし公曉の方へす悪信も坊中又たてこりて討つ  
せめたりよに寄り内々長尾新六定景子息太郎景茂同次郎風  
景親子も亦一番乗とつろつろお悪僧も志けりさして敗北し  
つひ公曉ハ此坊中より公寄手ハ空し引退きぬ公曉ハ兼て狙  
ひつゝ實朝公とれやす付おほせく早く其切城やら去我を坊ハ  
帰らざりて日比は足し備中の阿圍梨の雪の下北谷の宅へあきて  
飛つる膳もひいて食する間も彼首と放つやうそは所より使者を  
義村の館へ送りて今將軍の職開たり我ハ先將軍の嫡裔なり  
頼りハ足下とれを計議せしめしりしりしりこれハ義村の子  
息駒若公曉の才なりはるのうらみはるしり義村とれ

たし義村よりたすく先ぬ軍れ約つ以來のうらみ思ひくるる  
涙ヤ使者に對しつて依を謀ひ先私を御來臨りしや  
軍兵はけりしりしりしり使つて直義時のりしりしりしりしりしり  
子細く及そす公曉は味しきつて下知れ義村一族をいつめて  
評議し公曉阿圍梨ハ武勇はるく尋常の人よりすく勇壯  
と様しりしりしり長尾新六定景子の様しりしりしりしりしりしり  
黒華威の甲は着し西國の匠人そ強力のすけり雜賀次郎の  
外即後五人と具し公曉の在所備中阿圍梨の宅に赴きけし公曉ハ  
義村の迎への軍兵の來りけし侍所しりしりしりしりしりしりしり  
しり鶴岡のしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
きもつしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
定景の命りしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

しんれと心得しして互に強力のふかれの雌雄を争ふとて定  
景太刀を以て公曉の首級を以て其首を討つるは義  
すれりち義時の專ら頼家とて其檢多入りて公曉今十九是  
故頼軍頼家への君達とて當時鶴岡若宮の別當職なりし北条義  
時、以て天下の掌握せん多幸思慮とめりしれは白川左衛  
門尉義典より信奸の者嫉妬ひやと相つしひ兼て公曉は世  
に當將軍実能らるるに所又頼家への故とておもせすや早く討ち  
て志を報し所又この者養ふるがたきとてすめせりしれ  
義時の謀計して実朝公と公曉と討せ入る公曉と將軍家を殺せし  
謀及んとし披瀝、搦め捕て首と刎斬つの子孫と断く我身  
自然と天下の権を奪りんとし、義典は公曉の義典は  
其心剛強して氣早かりしれり義典は公曉の義典は

石の如く、又の仇を討んとす、毎夜所中を思ひ  
一の姿もてがてて、其身なり、兵  
早業早走人、人、其風を念す、  
飛、似、方、も、其、所、中、  
化のもの、男、も、怖、も、何、い、れ、  
實朝も、一、も、近、つ、け、り、  
神前、拜賀の儀式、の、り、  
幸来の布、意、を、遂、ら、せ、り、  
ひ定め、今夜の手、苦、を、  
其、公、を、切、り、  
家、を、殺、せ、北、条、が、

画工真虎云  
 神社解劍の  
 例故實古  
 年也其宮  
 姫神ありと  
 解劍之雄  
 神解劍  
 せよは  
 夏朝衣  
 夜劍を  
 仲章に  
 飛心は  
 公八天下の武の  
 して解劍  
 さいやま  
 雀の桐紋  
 小姫神在そ  
 ちや



公時義時の奸計に陥り伯  
 又之を實朝を殺す事  
 せざる留のいふ所を  
 御佛門に入りおれり  
 されし今武通上長し  
 ん道不弛るゆに  
 悪心と起しそよそ亦  
 定意と封じしは  
 實朝と武備者  
 然もよきいけれ  
 下暖巻を返り  
 武備更  
 口惜  
 終





一六北条をすくひて思ふ今晩所領と持し義時  
のしあやまらへ恨かき人章と討つ義時  
の病がまづく其切取逃し奸悪の其  
小徒黨しる者も今夜中討つ二位の尼公  
政信濃國の信人中野太郎助能少輔阿  
義時の館へ引あつ勝公の曉の才子  
と通せ者も取付取又餘類の者の坊  
八日の曉加藤判官次郎を使つて此大  
辰の刻所基所落飾り又武藏守親廣  
成の刻は実約の遺骸と勝長寿院の傍  
にありあつ故五作不具を葬りし  
長一つ小せりてたすり鬘の髪と  
首のかりりて棺

納めく葬りたり東鑑もあつ今持す  
小太時のゆとあつて公吃義村宅  
と持て後者あり其夜大雪の積り  
義村ありのりりて討つゆあひ  
首と持て討つ者も討つる  
の雪の中よりあつてあつて  
東鑑もあつてあつてあつて  
錦倉三代將軍の威權も只一時  
諸人暗夜は燭然りかひし  
尼公北条義時の姉君か  
廣元入道覺三善原入道善信  
錦倉は將軍もあつてあつてあつて





随兵ハ三浦太申兵衛尉朝村以下九人狩将衣束のハ三浦を居つた即  
 秦村以下十人次は若君三浦前中興小召れり所興の左右ハ佐貫次  
 即以下十人歩行して危從せり殿上人ハ伊予少輔大権朝臣諸大夫三  
 人侍三人医師ハ權侍医頼経陰陽師ハ大寺助晴言護持の僧ハ  
 大進僧都寛喜し次ハ陣の随兵十人次ハ陣ハ川さうして義  
 時の舍勇北條相模守時房くくつりり其夜の酉の刻ハ改所  
 船の儀式とくつりり若君ハ征夷大將軍藤原頼経とせりて  
 所切雅のほハ二位の左公所ハ足利とて簾中ハありて天下の政  
 とびたつとくつりり時の人ハ尼の軍と号し怖色にり了舍勇我討ハ  
 執持ハ号しく改り大小のりくくつりり其のひりり実朝公  
 武のくくつりり歌の通ハくつりり所ハくつりり定家公  
 才子の内ハくつりり常磐井の相國ハ衣笠内大將ハ鎌倉の右大臣

への進も歴た歌よみく珠玉実朝公直體好すれり万葉集  
 の古風とくつりり故定家公も及とくつりり風骨ハくつりり  
 家集と金槐集とくつりり三卷のり又文學も好すれり源仲章  
 其外蹴鞠ハくつりり嗜して風流好すれり其の  
 珠のり故其終とくつりりせりてくつりり其の遺憾ハくつりり

雅經建仁建永の以  
越前加賀介左五  
位少将承久二年  
後三位同年十二月  
参議

参議雅經

みづのやりのあや

さしゆりもみづ

さしゆりもみづ

新古今集秋下捲衣のこころはらけの捲衣とらふも  
あつてとてくきあつてこのもく秋の意はらけの山の秋風夜  
あつたさよふとひやとあはれよとあつたさよふ  
の望み夜寒はひて衣をひき着のあつたさよふ

所がれははるまのこころはらけの捲衣とらふも  
あつてとてくきあつてこのもく秋の意はらけの山の秋風夜  
あつたさよふとひやとあはれよとあつたさよふ  
の望み夜寒はひて衣をひき着のあつたさよふ

参議雅經の話

雅經ハ權大納言忠教の曾孫刑部中納言の孫トテ又ハ刑部卿トシテ  
母ハ顯雅の女ナリ雅經若シテ一吋花山院の釣殿ト富貴セシメ  
日コトモ賀茂の社は春侍セシメ一吋花山院の釣殿ト富貴セシメ  
あつてとてくきあつてこのもく秋の意はらけの山の秋風夜  
あつたさよふとひやとあはれよとあつたさよふ  
の望み夜寒はひて衣をひき着のあつたさよふ

惟此の御通ふ御座り候へば、  
御膳の御座り候へば、  
御膳の御座り候へば、  
御膳の御座り候へば、

宗やろと張は家と持し。雅  
徑柳と亮鳥井家と持し  
御座り候へば、  
御座り候へば、

既小東山  
御座り候へば、

亮鳥井  
大納言  
雅親

御座り候へば、

御座り候へば、



御座り候へば、  
御座り候へば、  
御座り候へば、

御座り候へば、  
御座り候へば、

つとて、  
中書王持持

菊の時節

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、



御座り候へば、





